

1. 研究背景

琉球諸島では、伝統的宗教における聖域、中心のシンボリズムとされる御嶽が存在する。琉球諸島において宗教的世界の中心は御嶽であり、集落の空間構成を明らかにするうえで、必要不可欠である。だから集落形態を構造化する基本的な要因として、集落自体がそなえてきた祭祀的世界や世界観を考慮する必要がある。これら諸集落が、なぜ現在もなお中心性を保っているのか。宗教的世界の視点から追求することにより、集落の本質的構造をみることができないのか。本研究では、空間と宗教的世界観とを密接な関係にあるととらえ、世界観によって秩序化され、集落空間が構成されていると考える。

本研究ではまた、神の重要性を認識している人びとによって中心性を維持され、神話による世界観が集落の形成概念にも反映されていると考える。それら中心性をもつ宗教空間を解くことによって、集落の空間構成のしかたを明らかにできるのではないだろうか。

2. 研究目的

本研究では、伝統的祭祀・祭祀空間に着目し、ふたつの集落の空間構成について考察していく。

ひとつは、集落の原型が比較的残っており、神とひととが共存し、伝統的な祭祀儀礼がおこなわれている宮古島北部の狩俣集落である。狩俣集落は神行事が盛んで、宮古でも古い集落のひとつとされている。そこで、信仰による祭祀儀礼において顕在化する居住空間の空間概念を明らかにし、祭祀空間や集落構成がどのように位置づけられるのか究明する。

いっぽう、来間島でも島立ての根源とされている御嶽信仰が根強く残されている。来間島についても狩俣集落と同様に居住空間の空間概念を明らかにし、集落の聖なる中心の歴史的推移を考察しながら、御嶽を中心とした空間がどのように構成されているのかを述べる。そして、両者の特徴や傾向を関連づけながら、宮古諸島における集落の空間原理が神観念との関係でどのように組織されているのかを考察していく。

3. 調査概要

来間島では2011年7月26日から8月10日までの17日間、狩俣集落では2012年7月25日から8月10日までの計18日間現地調査をおこなった。両集落ともに住居平面図、屋敷図の採集を主とし、御嶽の集落上へのプロット、立ち入りが禁止されている御嶽については写真撮影等をおこなった。同時に、祭祀や御嶽の詳細は聞き取りによって調査をすすめた。

4. 狩俣集落

狩俣集落における神話によれば、聖域である北の柱に始祖神が降臨したとされ、そこに始祖神を祀る御嶽がある。その神話にまつわる血縁関係による集団を「ムトゥ」とよぶ。それらの本家を「ムトゥヤー」とよび、集落内に点在している。

5. 狩俣集落にみる中心性

狩俣集落は聖域、境界（ムトゥヤー）、人間界（居住区域）、死者の世界（墓地）、そして「あの世」と考えられている海の5つの空間によって成り立っている。この集落は神と人間との空間の境にムトゥヤーが点在している。祭場であるムトゥヤーは宗教的空間であると同時に、空間を明瞭に分離させる境界としての側面をもち、聖域と人間界をつなぐ玄関口でもあったと考えられる。

また、この世の生物は天から生を授かり創出され、人間界とされる「この世」で生き、のちに死し、そして海のかなた「あの世」へ送られる。この集落における空間の連続性は、生物の一生を表現していることがわかる。村武は、この生命の誕生から死までの生命の根源を表していることを「始源的」とよび、それらの性質を象徴している空間による連続体を「始源的世界」と表現しており、琉球の神話による世界観のひとつの特徴としている。狩俣集落は、まさに「始源的世界」として存在している。

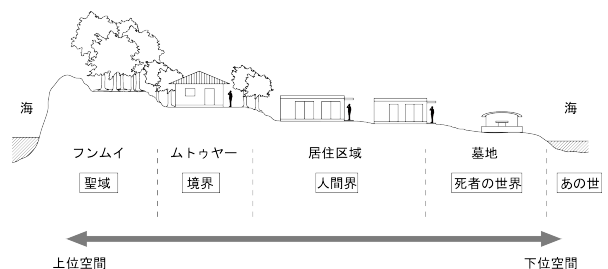


図 1 狩俣集落 空間の連続性

6. 来間島

来間島の神話によると、男神と女神が東西の御嶽にそれぞれ降臨し、島の中央で会って、交わり、来間島にある生物たちを創出した。その男神は東の御嶽「アガルヌサツ」に祀られ、女神は西の御嶽「イルヌサツ」に祀られている。また島の中央の雨乞い座にも拝所があり、集落内の祭祀空間となっている。

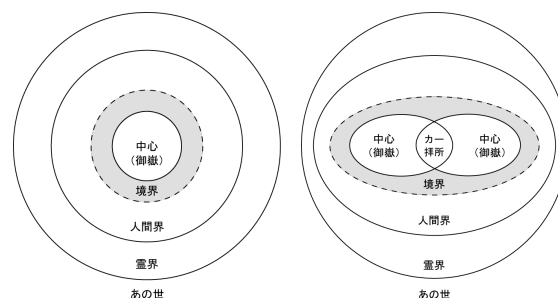
この神話とは別に宮古島から渡ってきた三兄弟が来間集落をつくったとされる神話がある。それにかかわる血縁集団を「ブナカ」とよび、集落内にブナカの本家が存在している。

来間島集落における御嶽とブナカは、別次元の神話から成立したものであり、関連性はないものといえる。しかし、双方とも配置関係に意味をもたせ、集落の構成法に深くかかわっている。

また、聖域、墓地の関係性をしめすと図 2 となる。神、人間、死者、そして「あの世」の海、という空間構成の軸を平面的にも表現しており、狩俣集落と酷似していることがわかる。よって来間島においても、空間による連続性は、生物の一生を表現していることがいえる。

8. 神話からみる集落形態の比較

御嶽の配置関係は両集落異なるが、象徴的な中心性をもっていることは共通している。そのため、その中心から派生する集落の空間構成は酷似している。聖なる杜がある北側、または始祖神を祀っている御嶽方向をもっとも上位とし、本家を挟み、人間界である居住区域がひろがり、次に死者の世界といえる墓地、そして海へと繋がる。このようにそれぞれ象徴的な世界が平面的に連続しているのである。



9. 結論

人びとは、集落に神々の御嶽をもうけることで集落の神聖化を図っていると考えられる。清浄で神聖な世界に生きたいという人間の宗教的観念をあらわしている。このような御嶽によって神聖化された空間は、御嶽を中心として秩序を保つ。その秩序は御嶽を基点としてそこから広がっていくのであり、空間の方向づけもこの御嶽を中心として成り立つのである。

図 4 集落の派生 狩俣集落（左） 来間島（右）

- 1) 『儀礼と口承伝承—古宮群島来間島の事例と中心に一』、国立民俗博物館研究報告別冊 3、松井健：34-74、1986。
- 2) 『祭祀空間の構造—社会人類学ノート—』、東京大学出版会、村武精一：1984。
- 3) 『聖なる空間と時間 宗教学概論 3 第 3 巻』、せりか書房、Mircea Eliade：1974。
- 4) 『宗教人類学』、東京大学出版会、吉田禎吾：1984。